

書評と紹介

竹村牧男著

『西田幾多郎と鈴木大拙』

——その魂の交流に聴く——

大東出版社 二〇〇四年一月三〇日刊

A5判 viii+四三四頁 四四〇〇円+税

大熊 玄

はじめに

本書は、西田幾多郎と鈴木大拙という二人の世界的思想家の親密な思想的交流の軌跡に焦点を合わせ、その具体的内実に迫りながら、その現代的意義まで論及する書である。構成は二部に分かれ、十章からなる一部では、西田と大拙の思想的影響関係が時系列に描写され、六章からなる二部では、各章で二人の宗教哲学について各論的に焦点をしばりながら、彼らの宗教哲学の核心にせまる究明が試みられている。

本書の構成と特徴

構成は次の通りである。

はしがき

I 寸心と大拙の魂の交流について

はじめに

一 大拙の渡米するまで

- 二 大拙の渡米後、帰国まで
- 三 京都の寸心と東京の大拙
- 四 二人の京都時代
- 五 鈴木ビアトリス夫人の死のころまで
- 六 山本良吉の死の衝撃など
- 七 寸心、鎌倉の晩年のころ
- 八 二人の浄土真宗への関心など
- 九 寸心「場所的論理と宗教的世界観」の完成へ
- 十 寸心の死と大拙

II 寸心と大拙の宗教哲学

- 一 大拙における禅と浄土
- 二 大拙の浄土教観―還相の問題をめぐる―
- 三 西田幾多郎と真宗
- 四 鈴木禅学と西田哲学―個と超個の思想をめぐる―
- 五 縁起と個物―仏教と西田哲学―
- 六 寸心と大拙の世界的意義について

ところで著者には、本書と相補完的な関係にある『西田幾多郎と仏教』という前著があるが、時系列の本書一部は、前著と本書二部の各論を結び付け、全体として一つの西田・大拙の宗教哲学論とする縦系のような役目を果たしている。著者は、「はしがき」で内容に重複のあることを認め、「強調したいところとしてお許しただきたく思う」と述べるが、それらの重複は、むしろ縦系と横系の結び目となり、あるいはまた各論の論及範囲が重なりあう面ともなっており、西田と大拙の宗教哲学を

立体的に捉える手掛かりとなっている。

また本書には、西田と大拙自身の著書・書簡・日記だけでなく、多くの研究者による先行研究が引用されている。引用は、参考箇所を指摘するだけでなく、煩を厭わずに（かなり長文であつても）本書に転載され、先行研究が著者の論に消化され、新しい展開を見せる。これらの引用は、前著と合わせて西田と大拙の宗教哲学研究に関する索引的役割を果たし、諸々の先行研究をつなげる結び目ともなっている。

ところで、西田と大拙の関係を端的に語るのに、森本省念や秋月龍珉による「西田幾多郎と鈴木大拙を一人格にしてみる」という考えがよく引用されるが、これが意味する内実の理解はそう簡単ではなかった。なぜなら、この言葉の理解には、その前提となる大拙の「日本的靈性」の理解、そして秋月らが見ている「西田幾多郎（寸心）」と「鈴木大拙」の個々の人およびその結びつきの理解、そしてその「一人格」に込められた含意の理解が必要となるからである。本書は、一部と二部（そして前著を）を合わせることで、それらの意味が縦横に論及されており、この秋月の言葉を実感を伴って深く理解させるものになっている。

I 寸心と大拙の魂の交流について

一部で描かれる二人の学究上の影響関係は、現代で言えば共同研究者のような印象を受けるが、その影響関係は彼らの生そのものに深くかかわっている。そこで、本書で取り挙げられた中でも特に興味を引いた二人の思想上の交流を以下に紹介しよう。

う。

一章では、四高講師であった西田は、明治二十九年から雪門に参禅を始めるが、それには大拙が渡米に先立ち出版した『新宗教論』が大いに刺激になったという。また二章では、渡米後の大拙が『大乘起信論』の英訳開始を西田に伝え、訳出への助力を頼んでおり、「大拙の英訳『起信論』の蔭には、寸心の惜しみない協力があつた」という。また、在米中の大拙が、自ら読んで「数年来なき命の洗濯したり」と語る、ウィリアム・ジェームズの『宗教経験の諸相』を西田に強く勧め、西田は初めてジェームズを知ることとなる。その後もジェームズの動向を気にする西田のために、大拙はジェームズに手紙を書いて論文を入手し、わざわざ西田に送っている。また、マツハの書物も大拙が提供したようで、西田の処女作『善の研究』完成の背景に大拙が深く関わっていることになる。

三章では、大拙の十数年ぶりの帰国に際して、当時学習院教授であった西田がその仕事を探し、結果的に大拙は学習院講師となる。その後、京都大学に移る西田は、懇意にしていた佐々木月樵に協力して大拙が大谷大学に移籍することに深く協力し、大拙の京都での住居も探している。この頃に、西田の弟子・務台理作が『歎異抄』や随筆「愚禿親鸞」についての印象を西田に話したとき、西田は次のように明るい笑いを交えて話したという。

「自分は臨済禅をやつたが、生家は真宗であり、とくに母は信心深かつたので、少年時代から親鸞は未知ではなかつた。長じて『歎異抄』を読んで心をうたれた。親鸞の思想

書評と紹介

に入るには『歎異抄』が一番いいと思っている。ただ私は宗教思想については友人の鈴木大拙には及ばない。彼は宗教的天才であるとともにすぐれた実践思想家でもある。」

この引用は、後の西田・大拙・務台の宗教哲学（特に真宗）をめぐる関係の伏線と言える。

四章では、二人の京都時代が描かれており、前述の佐々木月樵が、真宗だけでなく華嚴に関しても西田と大拙に影響を与えた可能性があることも本書で指摘されている。

五章では、西田と大拙が、おそらく本格的な哲学論文も含めて「お互いの著作・論文を交換する中で、さらに互いの思想を確かめ合い、啓発され」あつたり、また西田が「折につけ、禅語の出典などを大拙に尋ね、大拙はその折々、こまめに返事」をしている様子や、西田が大拙にアメリカから本を購入する手段を尋ねたりするなど、二人が学問上助け合う姿がうかがえる。

ここで、大拙が昭和十五年に出した『禅と日本文化』（日本語版）に対して、西田は、「私は思想上、君に負ふ所が多い」という言葉で締めくくる「序」を書き、また同じ頃に西田が出した『日本文化の問題』には、「東洋精神の枢軸は無心にあると考へられる（鈴木大拙）」と、大拙の『無心といふこと』からの引用があり、その相互の影響が指摘されている。

またこの章で著者は、『禅と日本文化』が近代日本の軍国主義への側面支援の傾向を持つという大拙への批判を紹介しながらも、それに対して、禅のそうした側面については大いに冷静に吟味・反省しなければならぬとしつつ、大拙（そして西

田）が「基本的に全体主義にまったく反対であり、現実の戦争には反対であったと思う」とする。その証左として、学徒出陣時の大谷大学での集会における大拙の挨拶の様子が紹介されている。そこで大拙は、配属将校の演説の後に、公然と「どういう理由があつてアメリカの青年と日本の青年が殺し合いをしなければならぬのか」「……こういう馬鹿げた戦争は必ず終わるに決まっている。終わつたあとの新しい世の中は君たちが創るべきである。だから君達は、この戦争で決して死んではならない。捕虜になつてもよいから生きて帰ってくるべきである」と自らの信念を示したという。田村寛三によつて『大乘禅』にて紹介されたもので、大谷では有名な話というが、それ以外の者にはあまり知られていない事であろう。

六章では、西田は、田辺元の『正法眼蔵の哲学私観』を激しく批判しており、大拙に多くの禅語（「平常心是道」「驢観井々觀驢」等）や道元について教示を受けている。そして大拙は、田辺ではなく西田を援護する立場をとっていることがわかる。

西田は、この頃に書かれた大拙の『盤珪の不生禅』（弘文堂）に非常に関心を持ち、さらに大拙の『盤珪禅師語録』の出版を岩波書店に強くはたらきかけて実現させている。相変わらず互いに書いたものを交換しあい、西田は大拙との関係を「かれは宗教、私は哲学だが、まったく同じ考えです」と伝え、大拙の『禅と日本文化』『無心といふこと』『盤珪の不生禅』をすすめている。

七章には、まず大拙の『文化と宗教』（昭和十八年）に対する西田の「大拙君は高い山が雲の上へ頭を出して居る様な人で

ある」で始まる序文が引用されている。西田は、この序の中で、大拙に関する三百字程の人物評をした後に、『文化と宗教』の中でも次の四点を「深い意味のある言と思ふ」とする。つまり、(一)時が独尊者の痕跡であること、(二)自分が自分でありながら自分でないという心が、自分が自分という心の底から出て来ると、人間が自然で自然が人間であること、(三)白雲未在の公案、(四)生死は脱得すべきものでなく、死が即ち生であるから、生死は生死する外ないことである。本書では、これらの点が西田の最終的な宗教論の中でどこに通じていくのか解説されている。また、この頃に西田は、後の「場所的論理と宗教的世界観」にて「逆対応」を説明する際に多用する「億劫相別而須臾不離、尽日相接而刹那不接」の句を久松真一から知らされ、大拙にこの句の出典を問い合わせている。西田は、徐々に「哲学の終結」として宗教を本格的に論じるための準備を進めるが、その背後には大拙の強い影響があることがわかる。

八、九章で第一部は「場所的論理と宗教的世界観」の完成に向かい、クライマックスをむかえる。ここでは、大拙の『浄土系思想論』(昭和十七年)や『日本の靈性』(昭和十九年)、務台理作の『場所的論理学』(昭和十九年)、そして田辺元の親鸞への反発などが前後して有機的に絡み合いながら西田へと刺激を与え、その最終的な宗教哲学に流れ込んでいく様子がよくわかる。前著でも論及されているが、西田が務台から『場所的論理学』を贈られたのが昭和十九年末、大拙から「金剛経の禪」を含む『日本の靈性』を受け取ったのが昭和二十年二月三日で、その翌日に西田は「場所的論理と宗教的世界観」を書き始

めたという。そして約一カ月後、西田は大拙に自らの宗教論の核心を明かす書簡を送る。本書で特に強調されるもので、一部そのまま引用しよう。

「私は今、宗教のことをかいてゐます。大体、従来の対象論理の見方では宗教といふものは考へられず、私の矛盾的自己同一の論理、即ち即非の論理でなければならぬと云ふことを明にしたいと思ふのです。私は即非の般若的立場から人といふもの即ち人格を出したいとおもふのです。そしてそれを現実の歴史的世界と結合したいと思ふのです。」

著者は、この書簡において「寸心は、宗教は対象論理では把握できないこと、大拙の即非の論理すなわち寸心の絶対矛盾的自己同一の論理こそが明らかにすること、そこに人・人格を打ち出し、しかも歴史的現実世界につなげるのだと言っている。宗教から歴史へ、自己の絶対者との関係の自覚から現実世界での働きへ、それが寸心の最後の問題なのであった」として、ここに「今日においても、仏教界において深く問われている重要な問題」を見ている。西田は、同じ書簡の中で「君の『日本の靈性』は実に教へられます(無念即全心は面白い)」と書いており、「無念即全心」については、翌日の書簡でその出典を大拙に尋ねている。この他にも、西田は宗教を論じる際に、大拙から多くの示唆を得ていたという。九章の最後には、「場所的論理と宗教的世界観」から十ヶ所程の文が引用され、大拙の思想とのつながりが示されて、『日本の靈性』の「場所的論理と宗教的世界観」への強い影響が見て取れる。

書評と紹介

II 寸心と大拙の宗教哲学

二部の一、二章は、主に大拙の禅と浄土に関する独自の理解が論及されている。そこで大拙は、個が超個に開かれながらも、あくまで個として働くという「真空妙用」を重視し、浄土教については、この現実世界で働くために浄土から直ぐに還ってくるという「還相」を強調している。こうした大拙の立場は、西田の、宗教の世界から人（人格）という根源的な主体が出て、歴史的現実世界において働くという「平常底」の立場と一致している。もつとも、こうした大拙の浄土教理解は、曾我量深によれば一遍上人に最も近いとされ、著者も、金子大栄を引きながら「やはり禅的であると思う」としている。が、著者は、まさにそうした西田と大拙が共に重視する、宗教の世界と現実の世界の結びつきをいかにして人において実現していくのか、ということを含めて今日の課題と考えている。

三章では、西田と真宗の関係が年譜形式で揚げられ、特に清澤満之との関係がまとめられた後に、西田による真宗（親鸞）への評価（共感）と批判が論及される。清澤との関係の中では、西村見暁『清澤満之先生』から引用がされて、西田の「我々が此処に生れ、此処に働き、此処に死にゆく、この歴史的現実の世界は、論理的には多と一との矛盾的自己同一と云ふべきものでなければならぬ」（『日本文化の問題』）の言葉が、清澤『宗教哲学骸骨』の根本に据えられた思想と同じであるという意見が紹介されている。

ところで、自己が個の極限に徹すれば徹するほど一転して逆に神（仏）に触れるという「逆対応」は、西田の宗教哲学の核心

の一つであるが、それは、『歎異抄』の「親鸞一人がためなりけり」において最もよく表わされており、真宗が、西田の宗教哲学の根本から深い影響を与えているという。その一方で、西田は、真宗を全面的に受け入れるのではなく、親鸞には歴史的な世界へ出てくる可能性があるにも関わらず、それが十分に把握されていないと批判して従来の親鸞理解に異議を唱えているという。西田は、親鸞の自然法爾を「事に当つて己を尽くすと云ふことが含まれてゐなければならぬ」ながらも「併し自己の努力そのものが自己そのものではないと知ること」として独自の理解を示すのである（『日本文化の問題』）。

四章では、西田と大拙の立場が、個と超個の関係において論じられ、二人の思想的一致とともに、哲学者と宗教者という立場の差異も明らかにしている。思想上の一致としては、西田と大拙が「宗教的実存に、個即超個・超個即個を、いなむしろ個即非超個・超個即非個を見ていくこと」、「禅も真宗も（キリスト教も）、その事実の自覚の道であること」、「その実存すなわち『人』が、全体作用するに至ること」、「その実の共通性を見ている。一方、差異としては、大拙が「超個」の内容をあまり説明しなかったのに対し、西田は、その内容を「絶対者の自己否定」として、個と超個の関係を「逆対応」の関係とし、さらにそうした超個による自己否定（絶対無）において成立する個が歴史的現実世界において創造的主体となる「平常底」を語ることになる。こうした西田の論理展開は、大拙には見られず、西田の哲学者としての面目があるようだ。五章では、華嚴に特徴的な、自己（主体）がその中に組み込

まれる全体としての縁起と、西田の「個の哲学」の共通性と差異が論じられる。西田の個物重視の哲学では、「個物の論理構造は、絶対無という場において成立し、かつ他の個物と関係して成立する」ことになる。この西田の「絶対無の一般者の下に個物が成立している」ということが、華嚴の理事無礙に相当して、その絶対無の自己否定が真如不守自性と一致し、理事無礙から事事無礙へと理が消えることと照応する。そして「個物は個物に対して個物である」ということが事事無礙に相当するとして、華嚴の世界観と西田哲学の非常な近似性が示される。ただ、西田は、キリスト教との対話を通して個物を自ら決定する歴史創造の主体として考えるが、華嚴では、個が主体性を発揮して世界を再構成していくという考察が乏しいという。西田哲学は、このように仏教にあまり見られない「創造的世界の創造的要素」としての主体を打ち出すというところに、現代日本における重要な意味を持つと考えられる。

第六章は、世界が一極支配されかねない今日において、世界に謙虚に学びながらも「日本という特殊にいかにも普遍を見出していくか」を追求した西田と大拙の今日的な意義が提示される。二人の思想は、二元論を前提とするジョン・ヒックの宗教多元主義の立場とは異なり、どの宗教にも共通した人（個）と神（超個）との関係の論理構造を明らかにすることにおいて、諸宗教の共存をはかるものとなっている。それは多様性の共存を否定するものではなく、理としての一元性を求めることにより、かえって事としての多様性をそのまま容認することが可能な立場である。二人の思想は、「各々が特殊性を保ちつつ十分

に共存共生できる」方向を示すものとして、「今後の宗教哲学の展開に重要な役割を果たし、かつ現実世界の歴史の創造に大きな役割を果たすもの」と考えられるのである。

おわりに

時系列を縦系に各論を横系に編まれた本書には、宗教哲学上の問題を扱いながらも、歴史的現実の世界に生きる西田と大拙の人が描かれていた。また、二人の宗教哲学が、過去のものとして对象的に研究されるだけでなく、まさに今の歴史的現実としての日本の宗教（特に仏教）において重要な役割を持つことが示唆され、現実には生きる著者自身にとっても強い影響を与えていることが触れられている。そうしたことを視野に入れると、宗教哲学の世界から出て歴史的現実において個として働くという事態は、西田と大拙の思想の核心であると同時に、そのまま本書自体の基調をなしているように思われた。